

Title	ヘルダーリンの『詩人の天職』における詩人の問題
Author(s)	甲斐, 浩一
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1995, 29, p. 55-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47859
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ヘルダーリンの『詩人の天職』 における詩人の問題

甲斐浩一

1

ヘルダーリン (Friedrich Hölderlin) において、1800年6月にシュトゥットガルトへ移住してから翌年12月にフランスへ旅立つまでのおよそ1年半は、いわば彼の詩人としての円熟期にあたる。ここでの詩作の重要なテーマのひとつは、この時期に先立つホンプルク時代の後期から抱えていた問題、詩人のなすべきことは何か、というものであった。以下で検討する4行16節のオーデ『詩人の天職』*Dichterberuf* (1800年夏に執筆、翌年夏に完成)はこの問題を全体の主題としている。¹⁾ この詩に対してはこれまで、他の作品との部分的な類似や関連を指摘する研究が多い。しかし、作品そのものの総体的な流れへと今一度目を向ける必要がある。そうすることによって、作品の主題と作者自身の生のありかたや内面の屈折との独特の結びつきが明らかになると思われるからである。こうした観点から本稿では、当該作品の解釈を通じて、そこに現れているヘルダーリンにおける詩人の問題の展開の流儀をうきばりにしてみたい。

2

この詩における「詩人の天職」の内容を確認することから始めよう。

Nicht, was wohl sonst des Menschen Geschik und Sorg'

Im Haus und unter offenem Himmel ist,
 Wenn edler, denn das Wild, der Mann sich
 Wehret und nährt! denn es gilt ein anders,

人がふだん家の内や広い空の下で
 腕を振るい心を配るようなことではない、
 たとえそれが、野獣よりも高貴に、男子として
 働き暮らすことであっても、というのは別のことが（第3節）

Zu Sorg' und Dienst den Dichtenden anvertraut!
 Der Höchste, der ists, dem wir geeignet sind
 Daß näher, immerneu besungen
 Ihn die befreundete Brust vernehme.

配慮し奉仕すべく、詩作する者たちに託されているのだから。
 いと高き者、この者にこそわれわれは捧げられている、
 常に新たにこの者が歌われ、親しみをました胸が
 彼をより身近に聞き知るようになるために。（第4節）

詩人は、究極の絶対的な神である「いと高き者」に捧げられている。そしてこの神のために生きる。²⁾これがヘルダーリンによる詩人の根本的な規定である。ここから、詩作することは、至高者に配慮し奉仕することに等しくなる。そして超越的なものとうした無償の関わりをもつという点で、人々が通常行っている労働とは本質的に異なるとされる。だが「詩人の天職」は、詩人がいったん超出した日常世界へと再び戻ったところでなされる。彼が歌うのは最終的には、人々が各々、詩人の歌を聞くことで、至高の存在をこれまでよりも一層身近に、心から親しく感じるためであるとされる。つまりは「詩人の天職」とは、「いと高き者」と日常世界の人々との媒介をなすことに他ならない。

ところが続く第5節の冒頭では「それにもかかわらず」という強い逆接の言葉が発せられる。自分は今「詩人の天職」の内容を端的に提示したが、

しかし「それにもかかわらず」それは単なる理念に過ぎず、実際には果たされていないのではないか。こう考えてヘルダーリンは、以下で「詩人の天職」に不可欠な3つの部分、「いと高きもの」、詩人、そして人々の姿を互いに関連させながら見ていくことになる。まず「いと高きもの」に「われわれ」詩人が初めて触れた体験が回想される。

Und dennoch, o ihr Himmlischen all und all
Ihr Quellen und ihr Ufer und Hain' und Höhn
Wo wunderbar zuerst, als du die
Loken ergriffen, und unvergeßlich

それにもかかわらず、おお、汝ら、天上の者たちすべてよ
そして汝ら、泉や岸や杜や丘すべてよ
そこで不思議にも初めて、汝が
髪を掴み、そして忘れられないことに（第5節）

Der unverhoffte Genius über uns
Der schöpferische, göttliche kam, daß stumm
Der Sinn uns ward und, wie vom
Strale gerührt das Gebein erbehte,

思いもよらなかった霊
創り出すもの、神々しいものが、われわれを襲い
そのためにわれわれの感覚は黙し
稲妻に打たれたように手足は震えたのだった（第6節）

「天上のものたち（神々）」と「泉、岸、杜、丘」とが最初に並列的に呼びかけられている。神話のイメージと具体的な自然とはもはや一体のものである。神話の神々は具体的な自然形象をとるだろうし、自然は神話の世界を喚起するだろう。ここでヘルダーリンの言いたいのは、「いと高き者」は、それ自体は人間の知覚や認識の彼岸にありながらも、例えばこうした

自然（神々）を通じて、詩人たちに作用を強く及ぼすということである。「不思議にも」や「思いもよらなかった」という表現が至高者の超越性を表す一方で、「いと高き者」は自然（神々）に囲まれた詩人たちの「髪を掴み」、³⁾ 彼らの「手足は震え」る。この体験の生々しさの度合いが強ければ強いほど、詩人は至高者に引きつけられている、捧げられていることになる。このようにして詩人の存在の核をなす部分が確認される。もう一つヘルダーリンの言わんとしていることがある。至高者の作用を受けるといふ超越的な体験の重要性だ。これは、通常の世界（自己）を超えたところにこの世界（自己）を成り立たせているものがあり、それを感受することが重要であるという認識と言ってもいい。ここでの体験が非日常的なものであることは、「われわれの感覚は黙し」とあるところからも明らかだ。その際に、「霊」が頭上に降りかかってくるというイメージが用いられている。ヘルダーリンはかつて「霊」を個人の本質、⁴⁾ 「新たな活動、幸福、喜び」の源⁵⁾ とみなしていた。この点もあわせて考えると、至高者に触れることによって詩人は、自己の本質、そして「創り出すもの（生を与えるもの、創造する力）」、さらには至福や喜びといった感情をも獲得するのである。こうして、詩人と至高者とは極めて生き生きと内面的に結びつくことになる。

3

ヘルダーリンは次に現在の詩人のありかたに目を向ける。まず当時のフランス革命とその後続く戦争（「広大な世界の休まない行為」）が挙げられる。これは彼にとっては、慌ただしく変化し時代の命運を決する出来事（「疾駆する運命の日々」）であり、太陽神のイメージで捉えられた至高者（「巨大な馬」を引き連れた「神」）によって導かれている。（以上第7節）そしてこれを「われわれは黙っていてよいのか」と彼は問う。続いて前節

とは対照的に、自然が織りなす四季の調和的な推移（「常に静かな年の和音」）を挙げる。そしてこれが詩人の内面において「あたかも子供が[……]師の神聖な純粋な弦にふざけて触れたかのように響いてもよいのか」と再び問う。（以上第8、9節）これらの反語的な自問は、歴史的事件および自然的事象の背後には至高者がいる、そうである以上詩人はそれらを直視して真剣に歌わねばならない、という主張に他ならない。さらに、かつて至高者の意思や作用を捉えたものとして、旧約聖書の「東方の預言者たち」の言葉と「ギリシア人の歌」が、そして現在そこから至高者の存在を聞き取らねばならないものとして、再びフランス革命後の動乱を象徴する「雷鳴」が挙げられる。（以上第9節）しかし詩人は、こういったものを耳にしているはずなのに、「聖霊」(Geist)、即ち至高者の意思や作用の伝達者を自らの利益のために濫用し、冒瀆している、と言われる。（第10節）こうした批判は、さらに詩人以外の人々にも向けられる。

Zu lang ist alles Göttliche dienstbar schon
 Und alle Himmelskräfte verscherzt, verbraucht
 Die Gütigen, zur Lust, danklos, ein
 Schlaues Geschlecht und zu kennen wähnt es

神的なものすべてが隷属させられてから、もう随分久しい、
 天上の力のすべて、この恵み深いものたちを
 楽しみのために、感謝の気持ちなく、投げ捨て、使い古しているのは
 狡猾な種族だ、しかも彼らは（第12節）

Wenn ihnen der Erhabne den Aker baut
 Das Tagslicht und den Donnerer, und es späht
 Das Sehrohr wohl sie all und zählt und
 Nennet mit Nahmen des Himmels Sterne

あの崇高な者が畑を耕してくれているときに

日の光や雷神を知っていると思い込んでいる、
 そして彼らはみな望遠鏡を覗き込み
 天の星々の数を定め、それらに名前を与える（第13節）

ここでは至高者の性質や働きが、「神的なもの」、「天上の力」（「恵み深いもの」）として、あるいは「崇高な者」や「日の光」（草稿では共に「日の神」⁶⁾）、「雷神」即ち自然現象と結びついた神々として、様々に名指されている。至高者のイメージをこのようにして膨らませつつ、ヘルダーリンは、彼本来の意味での詩人とそれ以外の人々（「狡猾な種族」）との極端な対立を明らかにする。詩人は至高者への奉仕（Dienst）を行うべく努める。しかしそれ以外の人々は至高者を隷属の状態（dienstbar）に置いている。つまりは至高の存在を、既知の世界へ引きずりおろし、いいかげんに扱い、そのくせ利用できるだけ利用しつくしているのである。こうした態度の根底にあるのは、自分の世界の絶対視、超越的存在に対する視線の欠如と呼べるだろう。それにもかかわらず望遠鏡を覗き込んで天上の星を分類している彼らの姿、ここにはおそらくヘルダーリンの絶望感が凝縮されていよう。それにしても、このような人々の中で一体いかに詩人として生きていけるのか。この問題を扱うのが、この詩の核心である最後の3詩節である。

4

ヘルダーリンは「狡猾な種族」から一転して至高者そのもの（「父なる神」）へと目を向ける。

Der Vater aber deket mit heilger Nacht,
 Damit wir bleiben mögen, die Augen zu.
 Nicht liebt er Wildes! doch es zwinget
 Nimmer die weite Gewalt den Himmel.
 父なる神はしかし、聖なる夜で目を覆う、

われわれがとどまれるようにと。

彼は粗暴なことを愛さない、しかしどんなひどい暴力も

決して天を屈伏させはしない。（第14節）

この箇所は「狡猾な種族」と詩人との際立った対比を受けている。したがって「われわれ」とは、詩人たちを指している。こうとるのが自然だろう。問題はここでの「夜」をどう捉えるかだ。現代人に対するヘルダーリンの絶望感、「目を覆う」という表現、そして「恵み深い」という至高者の像に着目すると、絶望を癒してくれる闇夜というイメージが浮かび上がる。そうするとここで言われているのは次のようになる。「父なる神」は「夜」において、闇のヴェールを時代の絶望的な状況に下し、これを詩人たちの視界から消す。この闇夜に彼らは目を覚ましていれば、周囲に邪魔されることなく至高の存在に向き合うことができる。現代において安らかに至高者に向かえる時間であり場である「聖なる夜」、これが約束されているために、詩人たちは本来ならば生にとどまれないような現代においても、かろうじて生き続けられるのだと。⁷⁾ 一方後半部でも「狡猾な種族」が念頭におかれている。そして「父なる神」の不可侵性、超越性が以下のように強調される。神は現代人の冒瀆的な振る舞い（「粗暴なこと」）に対して何の報復もしていないし、今後もそうだ。それは決して現代人の行為を好ましく思っているからではない。神が、彼らに影響されることなどない超然とした存在だからだ。このことを知らずに彼らはこれからも至高者を冒瀆し続けるだろう。「しかし」そのような「暴力」が、至高者に力を及ぼすことなど永遠にありえないのだと。

確かにこれで詩人にとっては、超越的な神との関係が保証され、現在における生の基盤が得られたことになる。しかしこれでもまだ詩人として生きるとは言えないのではないか。ヘルダーリンはこの状態を、「父なる神」の意思や働きを知るといって問題を手掛かりに、打ち破ろうとする。

Noch ists auch gut, zu weise zu seyn. Ihn kennt
 Der Dank. Doch nicht behält er es leicht allein,
 Und gern gesellt, damit verstehn sie
 Helfen, zu anderen sich ein Dichter.

賢明であろうとしすぎるのもよくない。天を知るのは
 感謝の気持ちだ。しかし詩人は、それを一人では保持しにくい、
 だから他の人々と集おうとする、
 彼らが理解するのを助けてくれるようにと。（第15節）

「父なる神」は、いくら賢明さの度合いを増したとしても知ることはできない。賢明さとは異なるもの、つまり「感謝の気持ち」によって知ることができるとされる。これは、ヘルダーリンの詩人としての態度の率直な表明である。また同時に、「感謝の気持ちなく」神々を「知っていると思ひ込んでいる」（第12、13節）現代人への批判でもある。この至高者を知るという問題を、ヘルダーリンは、詩人にとっての新たな他者の存在を導入してさらに展開する。ここについて、フリードリヒ・バイスナーはこう述べている。

敬虔な人間は、天の諸力の作用を天に感謝しているゆえに、天を知る
 [……]。ここでの知識やここで知ったことを、感謝の気持ちをもった
 敬虔な人間、まさしく詩人は、独占しておかない。彼は感謝の気持ち
 をもった他の人々と集い、他方彼らは、詩人が天の諸力の作用を敬虔
 に理解するのを助けてくれる。⁸⁾（強調は筆者）

これはこの節に対する最も卓越した解釈である。原文の構文に忠実であることや、「敬虔」という概念を導入していることは、教示に富んでいる。ただし、詩人が一人では保持できないものを天についての知識と解するのは正当なのだが、そう限定してしまうといささか窮屈に思われる。また詩人はなぜその知識を一人では保持しにくいのか、この理由は明らかにされ

ていない。これらの点に留意すれば、この節は次のように解釈できる。

1) 至高者と人々との新たな関係をうちたてるのが詩人の使命である。そのため彼は、その本性上、天について自分が知ったこと、つまり至高者の存在や意思を独占しておけない。詩人はこれを人々に告げたくないのであり、これを聞く者たちを求める。

2) 至高者を知る過程で詩人は、激しい感情の高揚（第5、6節）をも得る。彼はこれをどうしても誰かと分かちあいたいという素朴な気持ちに動かされ、他の人々と集う。

3) 詩人は時代を強く意識する存在である。天に対する「感謝の気持ち」を欠いた現代において、「感謝の気持ち」、あるいはこの気持ちが天を知るという判断、またはその判断の下で天へ向かおうとする態度、といったものは、常に揺り動かされ、傷つけられる。これは到底一人では保持しきれない。そこで同じ気持ち、判断、態度をもつ他の人々を求める。

この節はこのように幅広い解釈を許容するものと思われる。上のいずれにせよ、ここで詩人の求めている他者、即ち敬虔な人々は、詩人がさらに深く天を理解することを助ける。これは同時に、彼らもまた詩人と一緒になって天を理解することでもある。そうすることによって、天と詩人と敬虔な人々、この間に生き生きとした関係が成立する。つまりは詩人は自らの本来の活動の場を獲得するのである。

ところが「狡猾な種族」に代わる敬虔な人々の存在を想定したとたん、ヘルダーリンは再び詩人にとって苛酷な現実へと引き返す。最終節において提示されるのは、完全に孤立した詩人の姿である。

Furchtlos bleibt aber, so er es muß, der Mann

Einsam vor Gott, es schüzet die Einfalt ihn,

Und keiner Waffen brauchts und keiner

Listen, so lange, bis Gottes Fehl hilft.

しかし彼は、そうせねばならないなら、恐れることなく、男子として
孤独に神に向かい続ける、素朴さが彼を守る、
そして武器も策略も必要ない、
神の欠如が助けてくれるまで。（第16節）

詩人の孤立とは、周囲の人々、ひいては現状の世界のありかたすべてと敵対することである。だがこれはまた「詩人の天職」を放棄することでもある。しかしヘルダーリンは自己の存立を二重に危うくするこの状況を自ら選択し、これを恐れることはない。そして神に向かい続けようとする。この時彼はこう考えている。自分が至高の神に捧げられている詩人であるならば、素朴で敬虔な心情を保って神に向かい合う限り神によって守られるはずだ。それゆえに、自己の存在を守ろうとして、あえて周囲の状況や人々と争うこともしないし、それらを自分の意に沿うようにすることもしない（「武器も策略も必要ない」）のだと。こうして彼の内においては神への絶対的な信頼の気持ちが奮い起こされ、周囲の世界に対しては積極的な無為の姿勢がうちだされるのである。

そして続いて「神の欠如が助けてくれるまで」と言われるが、この部分は草稿⁹⁾では以下のものであった。

1) so lange der Gott nicht fehlet.

神が欠如していないかぎりは

2) so lange der Gott uns nah bleibt.

神がわれわれの近くにとどまっているかぎりは

ここだけ見ると、これらの草稿と最終稿とは意味の逆転があるように思われる。事実そうみなしている解釈も多い。しかし草稿と最終稿とではテキスト自体の表現も内容も大幅に異なっている。草稿では、自然（神）を愛し、その光の輝きや聖霊の中でひとつになっている者たちとの連帯の中で

この言葉は発せられている。¹⁰⁾ つまりヘルダーリンはいわば、すでに見た第15節の位相に立っている。しかしこの立場をあえて否定して、全くの孤独の状態で「神の欠如」という言葉が言われるのである。さらに草稿では、ヘルダーリンおよび彼の仲間となる人々と神との結びつきが表現されている。しかしそれに対し最終稿では、第12、13節にあるような神とは関わりをもたない時代の現状、彼にとっての神なき外部世界が「神の欠如」として表現されているのである。以上の点から草稿と最終稿とは、その質を全く異なるものとすると言わざるをえない。また完成度も後者の方が格段に高い。最終稿では、ヘルダーリン個人の神への信頼が表明された後に、彼の外部世界が「神の欠如」と力強く端的に提示される。このことにより、逆に神が欠如していない彼の内面が強く浮かび上がる。そしてさらには彼における外部と内部との激しい緊張関係がいやまに高まることになるのである。

では「神の欠如が助けてくれるまで」とはどういう意味だろうか。バイスナーは次のように解釈する。

地上から完全に神がなくなれば、そのとき初めて、神、すなわち神の欠如は [……] 詩人が「武器」や「策略」をもって [……] 感謝の心をもたない「狡猾な種族」と戦い抜くことを助けてくれるであろう。というのは詩人はそのときには、神的なものを回想することにいそむ唯一の者だからだ。したがって最終稿では、悲痛なイロニーをかすかに込めて、「神の欠如が助けてくれるまで」という表現に代わったのである。¹¹⁾

「神の欠如」を、神が人々に忘れ去られて完全に欠如するという、ヘルダーリンによって想定された将来の時代の相と捉える点は同意できない。また、「神の欠如が助けてくれるまで」を「武器や策略も必要ない」と結び

付けてイロニーを読み取るのも疑問である。バイスナーの解釈に同様の異議を唱えている手塚富雄はこう述べている。

詩人がただ独り神の前に立ちつづけるとき、彼の単純さと無心とが彼を助けるのはもちろんであるが、時代の一般的暗黒さえ彼を助けるに至るのだ。なぜなら神を欠いた暗黒の時代こそ詩人をいよいよ鍛え、またその中で真によきものは芽ばえるからである。¹²⁾

確かに困難な状況が詩人を強くするというのは、ヘルダーリンの他の詩に見られる思想であり、¹³⁾ この詩からもそれを読み取れないことはない。しかし、もう少し具体的に「詩人の天職」という問題と関連させて把握する必要がある。神と詩人と人々といった関係は最後までヘルダーリンの念頭にあると考えられるからだ。したがってこの箇所は、ヴァルター・ミュラー＝ザイデルが述べている「遠くにいる神々がその作用を及ぼして、人々が再び神々の方を向くまで、詩人は孤独に神の前に立たねばならない」¹⁴⁾ という方向で理解するのが妥当であろう。こうした視点から、この詩の最終部は次のように解釈できる。この「神の欠如」の時代にも、神の力は働いている。そうである以上その力は、敬虔な人々を生むはずだ。すると「神の欠如」の時代は、いわば神の再来の時代への萌芽、過渡期として捉えることができる。そうなればこの時代も、本質的には神が欠如していることには変わらないが、自分が詩人として生きる助けとなるだろう。だがそれまでは、現代では全く忘却されてはいるが、今なお自然、歴史的な出来事、そして自分自身にはその作用を及ぼしていると感じられる神、この神にたった一人でひたすら向かい合うこと、そして神の作用や意思を知ること、自分が詩人として現在できるのはこれだけだ。以上のような、一縷の希望を抱きつつも、悲壮な決意でこの時代に生きようとする姿勢、これがこの詩の最終詩行において提示されるのである。

5

ヘルダーリンが当初この作品において、現実の中で活動する詩人の姿を具体的に描こうとしていたことは、表題のみならず、冒頭部からもまた容易に看取できる。第1節で「聖なる葡萄酒でさまざまな民族を眠りから呼びさましながら」旅を続けた「歓喜の神」バッカスが描写された後、こう歌われる。

Und du, des Tages Engel! erwekst sie nicht,
Die jetzt noch schlafen? gieb die Geseze, gieb
Uns Leben, siege, Meister, du nur
Hast der Eroberung Recht, wie Bacchus.

そして日の使者よ、汝は彼らを
今まだ眠る者たちを呼びさまさないのか、掟を与えろ
われわれに生を与えろ、打ち勝て、師よ、汝だけが
バッカスのように征服する権利をもつものだから。（第2節）

詩人は、太陽神にして詩人の神であるアポロン（「師」）の像と融合して「日の使者」と呼ばれる。¹⁵⁾ 彼は、現在人々を神へと覚醒させる圧倒的な力をもつ者とみなされている。しかしこの神々にも等しいような詩人の姿は最終的には、神への信仰のみを頼りに孤独に一人生きる姿へと変貌する。この激しい落差は、この作品における詩人の問題の特質をよく示している。ヘルダーリンは、現実を超えて高く飛翔する詩人の使命という理念をしつかりと保持している。しかしその一方で、彼はこの理念を現実の中で展開せずにはおれない。すると彼は必然的に世界との対立に陥り、内向して自分自身のありかたの根底へと深く進んでいかざるをえないのである。この詩を見る限りでは、ヘルダーリンにおける詩人の問題は、世界における彼の実存の確認と同義であるように思われる。

テキスト Friedrich Hölderlin: *Sämtliche Werke*. Frankfurter Ausgabe. Hrsg. v. D. E. Sattler und Michael Knaupp. Bd. 5. Frankfurt am Main 1984. (以下 FA と略記)

注

- 1) 同様の詩には他にオーデ *Dichtermuth* がある。なおこの時期の作品には、詩人の問題を最終詩行において触れている詩がいくつかある。Vgl. Friedrich Beißner: *Dichterberuf*. In: *Hölderlin-Jahrbuch*. 1951, S. 1f.
- 2) 第4節第2詩行の以下の草稿を参照。
Ein Gott ists, dem sie leben und eigen sind (FA, S. 549)
- 3) これは預言者エゼキエルにおける主エホバの体験を暗示している表現でもある。Vgl. Friedrich Hölderlin: *Sämtliche Werke*. Große Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. v. Friedrich Beißner (Werke) und Adolf Beck (Briefe und Dokumente). 8 Bde. Stuttgart 1943-1985, Bd. 2/2, S. 484. (以下 StA と略記) Friedrich Hölderlin: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. v. Jochen Schmidt. 3 Bde. Frankfurt am Main 1992-1994. (=Bibliothek deutscher Klassiker) Bd. 1, S. 780. (以下 BdK と略記)
- 4) Vgl. 1793年7月21日から23日の間の書簡。StA, Bd. 6/1, S. 85.
- 5) Vgl. 1794年7月10日から15日の間の書簡。Ebd., S. 124f.
- 6) 前者に関しては Vgl. FA, S. 550, 551.
後者に関しては Vgl. FA, S. 551, 556, 558.
- 7) 第14節第2詩行の *bleiben* という語の意味についてはバイスナーの見解を参照。彼は *Versöhnender der du nimmergeglaubt...* (1801年/ 未完成) 第1稿の „Und mögen bleiben wir nun.“ (v. 89) という箇所における *bleiben* を「生にとどまる」、つまり生き続けると解釈する。(StA, Bd. 2/2, S. 709) そして同様の意味をわれわれの詩の *bleiben* にも見る。(StA, Bd. 2/2, S. 486)
- 8) StA, Bd. 2/2, S. 486. Vgl. Beißner: a. a. O., S. 14.
- 9) FA, S. 556, 558.
- 10) Ebd.
- 11) StA, Bd. 2/2, S. 485f. Vgl. Beißner: a. a. O., S. 14f.
- 12) 手塚富雄『ヘルダーリン』中央公論社 1985年(下) 149-150ページ。
- 13) 例えば *Brot und Wein*, v. 115-119.
この箇所を引き合いに出して、リュエーダースは手塚と同様の解釈を行って

- いる。Vgl. Friedrich Hölderlin: *Sämliche Gedichte*. Hrsg. und kommentiert v. Detliv Lüders. 2 Bde. Bad Homburg v. d. Höhe 1970; 2. Aufl. Wiesbaden 1989, Kommentarband, S. 213f.
- 14) Walter Müller-Seidel: *Hölderlins Ode »Dichterberuf«*. *Zum schriftstellerischen Selbstverständnis um 1800*. In: *Gedichte und Interpretationen*. Bd. 3. Hrsg. v. Wulf Segebrecht. Stuttgart 1984, S. 239.
- 15) Vgl. BdK, Bd. 1, S. 779.

(大学院後期課程学生)